

福祉教育の今とこれから

共に生きる文化の創造を目指して



日本福祉大学 学長補佐
原田 正樹 氏

地域にお住まいの方々が抱える生活課題が多様化・深刻化を増す中、それらの解決・予防の為に、住民一人ひとりが、福祉に関心をもち、地域に存在する様々な課題に気づき、解決に向けて自分にできる事を考え実践へ移していく基盤づくりとして「福祉教育」の役割が期待されています。今必要な福祉教育の在り方とは何か。日本福祉大学学長補佐原田正樹氏から今後の福祉教育展開への示唆を頂戴しました。

社会福祉協議会と福祉教育

「地域福祉は福祉教育に始まり福祉教育に終わる」これは、「住民主体」を大切にしてきた社会福祉協議会の先輩達が語り継いできた言葉です。社協の使命は「地域福祉の推進」そしてその主人公は地域住民です。社協は住民主体を掲げ、住民自身の学びと地域福祉活動を継続的に支援す



1人暮らしの聴覚障害者宅を訪問「たくさんお話できて嬉しかった！」

ることを使命としてきました。この住民主体は、放っておけば住民がその気になるわけではなく、住民が福祉に関心をもち、福祉についての問題を共有し、福祉を通して地域づくりをしていく。そうした意識を促しながら住民参加を促していく、この取組みを丁寧に行っていく事が、社協の目指す「誰もが住みよいまちづくり」に繋がります。そしてその際、住民の主体形成を促していく為に、福祉の学びが必要不可欠となります。本来、社協が進めてきた地域福祉は、福祉教育やボランティアなしには実現できず、そこそが社協の根幹であったにも関わらず、行政からの受託事業や収益を得るためのサービス提供に関する事業が多くなるにつれ、目の前の事業に追われ、福祉教育やボランティアは付属のような存在になっていく社協も少なくありません。福祉教育を行わない社協は地域福祉を捨てたと同じ。地域福祉を本気で行うなら、福祉教育なくして、住民主体の地域福祉の実現はあり得ないのです。

福祉教育の広がりや形骸化

福祉教育の歩みを考えていくと、2002年「総合的な学習の時間」が導入された事を大きなきっかけと

なくても、そのことが理解できるのです。障害者と出会い、生活にふれ、「できること」と「できないこと」を知る。「自分と違うところ」と「同じところ」に気付く。新しい障害観と共に生きる心と態度を見につける、ICF（国際生活機能分類）の視点を取り入れた福祉教育について考えていく必要があります。また、高齢者の今までの暮らし「どう生きてきたか」に触れる事で尊厳を育む。そこを意識してプログラムを展開する事が大切です。

地域の福祉力を高める

福祉教育を地域ぐるみでしていくと、子供も大人達も、より良いまちについて考えます。福祉教育を通して、住民主体の福祉のまちづくりに繋がっていくのです。

宮城から発信する福祉教育

少子高齢化、人口減、後期高齢者増加、単身世帯増加等、社会の動向や生活環境の変化を背景とし、地域の中で様々な問題が広がっています。社会的孤立の問題の多く、生活のしづらさを抱えた方々が増えている事が自殺者の増加へも繋がっています。生活困窮者支援と社会的包摂を巡

して変わりました。かつては志のある先生だけが各地で行っていた福祉教育が、全国どここの小学校、中学校、高校にも広がりました。福祉を学ぶ機会が増えましたが、「量」として広がれば広がる程「質」の問題が問われるようになってきたのです。

「福祉の授業」の中で多く行われ始めたのが、障害や高齢の疑似体験、慰問としての施設訪問、手話や点字などの技術の習得のプログラム。これらのプログラムは、やり方、伝え方を間違えると「貧困的な福祉観の再生産」に繋がりがかねません。

疑似体験をした子ども達は「怖かった」「不便だった」という感想を持つことが多いでしょう。「優しくしてあげましょう」「声をかけてあげましょう」「先生や指導者がまともです。子ども達は「障害者、高齢者の気持ちがよく分かった。今度会ったら優しくしてあげたい」と感想文には書きますが、実際の意識の中では、障害者や高齢者へのマイナスのイメージを強く持つてしまい「自分と同じ人」「対等な個人」としては捉えられなくなってしまう可能性があるのです。



出典：全社協 福祉教育実践ガイド 地域福祉は福祉教育ではじまり福祉教育でおわる

る議論も盛んにされるようになってきました。包摂的社会的実現の為に、また、地域に山積する社会的課題解決の為に、多様な生き方を受け入れられる住民の意識を醸成し、態度と行動を変えていく、福祉教育が大きな力を発揮すると思われれます。

東日本大震災の経験を経て、宮城の皆さんが、そして社協が乗り越えてきた経験と学び。それはこれからの日本の地域福祉や福祉教育に活かされるはず。ぜひ宮城から沢山全国に向けて発信して下さい。期待しています。



地域ぐるみで防災マップ作り
【いろんな人達が暮らしているんだね】

福祉教育は、共に生きる力を育むことを目的とした教育活動です。その為には、命の大切さや人間の尊厳について、現実課題に即して学んでいかなければなりません。

対人関係能力を育む

福祉教育実践の過程では、世代の違う人、障害者、地域の大人、普段出会う機会のない人達との接点を意図的に作ります。「多くの出会い」を通してコミュニケーション能力を育む事ができます。福祉教育を展開する際には、地域の大人達や関係機関との協働を心がける事で、豊かなプログラムに繋がります。

自己肯定感を育む

自分の存在を確かめる事、ありの

福祉教育をとおして育むもの

まの自分を受け入れる事。この体験は特にボランティア体験の中で育まれやすいと言われています。今時の子供達は大人に感謝の言葉をかけられるという体験が少なくなっていると言われています。高齢者施設で1日を過ごした男の子が感想文に「小さな手こんな僕にもできること」という一文を書きました。「ありがとだね、また来てね」と声をかけられた。よく目にする光景ですが、その一言がその子の成長の中で大きな糧となり生きる力となるでしょう。

共生的人間観を育む

子供が重度の障害者と初めて対峙した時、ビックリしたり、怖がったり、違いということに目が行き戸惑います。これは悪い事ではありません。「怖い」という感想を「そんなこと言っちゃダメ」と止めたら、子供達の気付きはそこで終わってしまいます。「違い」だけでなく「同じ」にも気付ける学びを大切にしなければなりません。一緒に過ごす、「コミュニケーションをとる、その中で「あ、僕と同じだ」「私と似てる」を発見する。これを「接点を探す営み」と呼んできました。これに気付いた子供達は「障害がある人もない人も同じ人間だ」なんて言葉で説明され